

<書評>

新保輝幸，松本充郎・編
「変容するコモンズ-フィールドと理論のはざまから」

岩手大学人文社会科学部 松岡勝実



本書は、我が国のコモンズ変容をフィールドから報告し、実態に対する経済学的理論枠組みを提示し、フィールドに戻り、経済学と法学の視点から望ましい自然資源のあり方を展望しようとするものである。スケールの大きい、動的かつチャレンジングな計画である。読者にとってはそれなりの構えや準備が必要だろうか。まずは序章を紐解いてみよう。序章はサイトマップの役割を果たしており、本書を読み進むための基本概念、課題設定、そして到達部分を俯瞰できる仕組みがあって親切だ。本章部分では、まず、フィールド研究が、海、川、草原、地下水の順でリレー的に展開され、かつ抽出される問題も連関して扱われている。続いて、理論的研究部分として、数量分析、類型論、コスト論があり、フィールドに戻っての検討がいわば本章部分の小活を成す。そして終章においては、問題類型ごとの手堅い制度設計の提案がなされると同時に「フィールドに向かって命がけの跳躍」も試みられている。

海のコモンズで新保は、高知県柏島・サンゴの海での過剰利用ないし利用競合の事例を分析し、変容するコモンズの再構築の鍵としての社会関係資本（伝統的漁業者集団の「権威」）に注目する。緒方賢一は、かかる利用競合を視野に入れつつも高知県沿岸域での漁業的利用の衰退（共同漁業権の空洞化）の問題（過小利用）を取り上げ、漁業集落が主体となった管理による利用の回復を示唆する。

川のコモンズで松本は、高知県物部川のアユ激減問題の要因（法律・行政・地域社会）を析出し、流域ガバナンスの視点でコモンズを攻究する。高橋勇夫は、内水面の漁業権制度の問題点に言及しつつ、全国的に見た場合のアユ減少の過程を丹念に検証する。

草原のコモンズで高橋佳孝は、都市住民との協働による、阿蘇草原の再生利用の成功事例を通じ、コモンズ論であり意識されてこなかった「管理の義務」に着目する。この事例とは対照的に、飯國芳明は島根県三瓶草原の再生利用の停滞の原因を史的に追究し、入会権の変容（「一人入会」）による集団管理の欠如と入会権自体の存在を疑問視する事例を紹介する。

地下水のフィールドでは、新保が与論島のサンゴ礁の劣化と地下水の富栄養化との関係性をデータ分析し、地下水の富栄養化が「コモンズの悲劇」と同様のメカニズムで生じていることを論じ、従来の社会関係資本を基盤にして化学肥料を減らした農法への誘導を説く。松本は、地下水問題に呼応して、地下水をめぐる裁判例を検討した上で、地下水の保全と利用については、地域共同体よりも、法律また条例で管理すべき制度論を主張する。

本書のコモンズ論は、「コモンズの悲劇」とコモンズ資源（CPR）を起点としている。CPRには、潜在的な利用者を排除することが難しく（排除性が低い）、利用者が増えると他の利用者の効用が低下する（競合性が高い）という性質がある。岡村和明は、定量分析の手法で、前者のオープン・アクセスの性質に焦点を当て、コモンズ利用者の協調を促す理論的枠組み（所有権、選好、社会資本）を提示する。飯國は、伝統的コモンズ論の盲点（排除を必要としない過小利用）を衝いて、資源維持・改良の観点から人的資源の投入（「人為ストック」）の意義を再考する。さらに新保は、長期的に持続するCPR管理組織のコスト面での分析枠組みを、社会関係資本の形成に応用する。以上の経過を踏まえ、執筆者たちは、フィールドの研究に立ち返り、持続的自然資源の利用の議論を発展させている。

さて、フィールド研究から出発した本書は、フィールドに還元すべく、その使命を果たすことができただろうか。その判断は読者諸兄に委ねたい。ただ、一見大風呂敷を広げたような本書の目論見は、執筆者たちの、長年月にわたる用意周到な調査・研究の集大成を踏まえたものであることを付言しておきたい。コモンズ論のプロパーはもとより、環境、市民社会、社会関係資本、都市計画、まちづくりなどに関心をもつ人々にも是非勧めたい一書である。

(ISBN 978-4779506475・A5版・301頁・3500円+税・2012年刊・ナカニシヤ出版)